

子供という生物の存在する会社（社会）生活

Working for the Company with the Living Organism 'Kid'

華房実保 Miho HANAFUSA

いわゆる大人は通常一人で生きることができる。いわゆる子供は通常一人で生きていくことは困難である。それだけのことである。そして、大人として精一杯社会で仕事をしようとしたときに、一人では生きていけない子供が加わるというそれだけのことが幾多のドラマを生む。

思えば13年ほど前、この会話から始まった。妊婦になったことを告げると、上司は、満面の笑みで、「おめでとう。予定日はいつなの？ いつから復帰するの？」とたいへん喜んでくれた。産前休暇に入る直前の実験の追い込みを含め、生き物が世に存在する前の妊婦での研究生活・会社生活は、存在後と比べ予想されたこととは言え、俄然平和なものであった。記憶の彼方になりつつある山あり谷あり谷あり山ありの人生を振り返ってみたい。

生まれるまでも職場の方々とは仕事で結構連絡を取りながらの産休であった。原因不明だが、生まれる直前に胎盤早期はく離という異常出産。真夜中の緊急帝王切開で何とか無事に生まれた。陣痛プラス麻酔がちっとも効いていなかったそのときの凄まじい状態は、一生鮮明に覚えていると確信できる。きっと昔なら、よく時代劇に登場する母子ともにご臨終だったであろう。はじめて、なるほどこのことだったのか。と妙なところで感心した。現代医学、早期に異常に気がついてくださった看護師さんをはじめ多くの方々のおかげで今母子ともに元気に生き延びている。

退院直後もちょうどタイミング的に特許の海外出願の期限だったので、寝ているすきにこっそり書類を出しに郵便局に行ったりした。研究開発したものが商品化される時期と重なっていたため、自らの意志で産休をとらずに、産前産後休暇だけで、さっさと出てきてしまったが、今から思うと、滅多にないどっぷりの育児の機会を逃してしまったと少し後悔している。



(株)三菱化学科学技術研究センター (227-8502 横浜市青葉区鴨志田町1000番地)・事業化推進部グループマネージャー。1989年東京大学大学院農学系研究科農芸化学専攻修士課程修了。専門は生化学、植物生理、現在は技術経営。
E-mail: 2306475@cc.m-kagaku.co.jp

寝つきも悪く、夜中に散々起こされまくった0歳は0歳で、毎日どうやって生きながら得ていたか想像を超える合宿所のような日々。3歳は3歳なりの事件が。10日ほど出張で留守にしておりしばらくぶりに帰宅してみると、娘の頭にぐるぐるの包帯。夫曰く、遊んでいてピアノの角に頭をぶつけ頭の皮がパッカリ割れ救急病院に駆けつけ何針か縫ったと。自分で自分を責めるしかない。

フルタイムで仕事をしているお母さんは意外に少なく、小学校のクラスで2~3名。お友達の家庭とはまったく異なるマイノリティー。

出張で留守のときも、あまり物心つかないころは一瞬の修羅場を過ぎれば良かったが、大きくなるにつけ、抵抗を受け、その意義、必要性を説明する義務・責任が生じ、仕事を見つめ直すきっかけとなる。

超半面教師になるのもそれはそれでシンプルでわかりやすいのではと楽観。運が悪かったと諦めてもらうしかないとは完全開き直り。生涯に影響する壮大な実験には違いない。社会人になり同じような状況にならないとおそらくわかってもらえないであろう。思うところ多い娘も今春より花の中学生。

特に幼少時代の慌しい我が家は、遅いのか泊まりなのか、誰が迎えに行くかが最重要。お互い米国のどこかにいて各々のお土産を見るまでついぞどこにいたかわからなかったことも。そんな中、常に両親が大活躍。'立っているものは何でも'を地でいく状態には、ようやく子供も独立し穏やかな老後もつかの間、またの孫育て、こんなはずじゃなかったことの連続。いくら感謝してもしきれない。

勤務地には女性や子持ちの方も多く、日頃の何気ない会話にも知らず知らずのうちに助けられているのだと思う。

人生の中で、むしろ予想しないことを楽しむ、運命を受け入れる、家族に思いっきり頼る、周りの協力を得る、我が侏、自然体であったからこそ、良くも悪くも今の自分がある。自分以外の力が本当に絶大で偉大である。'感謝'という言葉以外には見つからない。

今までのすべての'感謝'のためにも、男女共同参画委員会なるものの必要性がない世の中になっていくように、微力ながら頑張っていきたいと思う。